

「コロナのせいでも、身体が弱るだけではない。い。じ。ろ。まで弱くなる。」もう年だから「なび」と言っているけど、取り返しがつかなくならぬ。

72歳のE子さん。急に忘わっぽくなったり。ようだ。なんとなく頭も痛い。でも、鎮痛剤は効かない。だから、「きつ」と、頭の病気に違いない「と、ひたすら暗くなっていた。

検査のうえでは確かに、新しいことを記憶する「記憶力」は落ちてきている。だが、E子さんが訴えるほどではない。ま、「ひょろたんから駒」ということがある。脳をMRI（磁気共鳴画像装置）で調べてみた。でも、脳の萎縮も腫瘍もない。で、よく話を聞くと、毎日、朝方が憂鬱<sup>うつろ</sup>で、気分が晴れない。よく眠れないし、何もする気が起きないという。となるやE子さん。ひょろとして「老人性うつ」ではなからうか？

ひとり暮らしのE子さんにとって、「コロナの影響は大きかった。外出自粛のせいでも、近くに住む息子や孫の顔さえ、めったに見られない。余計に寂しい。その上、気晴らしの買い物もできない。ストレスがたまるばかりだ。そのうち、なんでも話せる友人が亡くなった。ショックだった。も

う、愚痴をこぼす相手がない。それから。毎日、楽しいことは一つもない。

時々、死にたいと思うようになった、と。そうだ。年を取れば、コロナがなくとも「うつ病」になりやすい。体力や気分の低下に気付いて、落ち込む。先々が不安になる。持病が増えたり、家族や友人を失う機会が増えたりする。喪失感を味わいやすくなるのだ。

そんなうつ病の怖いところは、自殺に走るひとがいることだ。「訴えが下げされた。甘えているのでは？年を取れば、当たり前」なんて、禁句である。傷つきやすく折れやすい老人のこころの変化を早く見つけてあげないと。痛い眼に遭つのは「メンだよ、ね。

(石黒修三＝いしほろクリニック・脳神経

外科専門医・131北國新聞掲載)